

# 若年寄

榎田無刺

三三 四年前のことである。サイクリング旅行で秋山郷から奥志賀を抜けて野沢温泉を目指して有料スーパー林道を走っていた。山腹を縫って続く有料スーパー林道は砂利道で上り下りがきつい。四十半ばの年齢と八十キロ近くの体重では走り続ける事はできない。

傾斜の強い上りは自転車を杖代わりに歩く。お盆前の暑い盛りである。標高七、八百メートル付近であるから、下界よりは涼しい。

走っている間はまことに気分がいい。ところが、自転車を降りて歩き出すと途端に暑い。太陽の強い光が容赦なく素肌の出ている所を突き刺す。その上に虻が寄って来るので足を止めることができない。止まれば刺される。ハンドルを握っているので手で追い払う事もできない。汗を流しながら上り切った所に料金所があった。七十台のお年寄りが二人で料金番をしておられた。退屈そうにしておられたので、空いて

いる椅子に腰かけて休ませてもらった。二人は熱い番茶を出して下さった。暑いときに汗をかいた後は熱いお茶が何よりである。下界の眺めを楽しみながら、おいしくいただいた。そこからは越後平野が霞んで

見えなくなるほど遠くまで見晴らせる。

もう少しで尾根を回り込み、後は下り一方で野沢温泉である。今晚の温泉上がりのビールが楽しみである。私はゆったりとした気分で爽やかな空気を吸っていた。そんな私の横顔を見ておられた一人がおっしゃった。「あんた、定年は済んだかね。」これはショックだった。

六十前後に見られたのである。若い頃から額が頭の天辺に向かって拡大し、老けて見えることは自覚していた。しかし、年下の人からならともかく、年上の人からだったものでこれはこたえた。

真つ昼間から呑気に自転車なんぞを引いてふらふらしているからそう思われたんだろう、とその場は自分で自分を慰めた。

自由業なので同年代の仲間よりは、自分は精神的にずっと若いと自負していた。精神的に若ければ、当然、肉体的にも若く見えると思っていた。私の市には温水プールがない。それで、隣の市の温水プールまで自転車で行って泳いでいる。

私は学生時代はほとんど泳げなかったのだが、十年ほど前に一念発起してプールに通い始めたら平泳ぎだ

けは泳げるようになった。自己流なので速くは泳げないし、無駄な動きも多いのだろうが、泳げること自体がうれしい。平日の市民プールは若い人はほとんどいず、空いている。子育てを終えたママさんや、それこそ定年退職したような人が多い。そんなプールで鯨かマンボウが波間に漂って昼寝でもしている気分でゆっくり泳ぐ。それが楽しい。それで今でもちよくちよく通っている。

去年の事である。いつものように泳いでいた。その日は体調がよく、普段よりは力を入れて泳いでいた。自分としてはイルカになったような気分であった。プールの端に泳ぎ着き、立って一息ついていると声が掛かった。隣を泳いでいた八十才近い、かなり肥満のご婦人である。お互い暇人同士である。知らない同士でも声を掛け合うことはこのプールではよくある。彼女はにこにここと笑いながら言った。「あなた、七十は超えているでしょう。」 またである。それも今度は「七十は超えているか」である。私は相手の顔を見直した。しわの感じからして、どう見ても相手は八十近い。私は憤然として答えた。「いえ、まだ五十ですけど。」 それを聞いてご婦人は金歯を光らせて大笑いした。「そんなわけないでしょう。あなたが五十キロしかないわけないわよ。あんまり波が来るから聞いたのよ。」 年齢ではなかった。体重を聞かれたのだ。った。

